

シニア研究者招聘  
八尾隆史

2016年6月28日から7月1日まで英国ノッティンガムで開催された英国病理学会学術集会に参加した。主催のノッティンガム大学の Ilyas 教授（愛称 Latch）が学会会長で、私が1994年に留学したロンドンのセント・マークス病院で一緒に仕事した仲でありその後も交流を続けてきた。実は2005年に私の兄・八尾建史（福岡大学筑紫病院・内視鏡部教授）が内視鏡の指導のためノッティンガム大学附属クイーンズメディカルセンターへ1年滞在している際に、Latch が教授として赴任し、兄とも一緒に仕事したという縁もある。その時私も家族とともに訪れ、緑が多く落ち着いたある心地良い街であったと記憶していたが、11年ぶりにノッティンガムも前回と同じ印象であった。

Latch の専門は大腸癌であり、2013年の日本病理学会（札幌）には日英交流のシニアとして「Colorectal cancer: Back to the future!」という演題の講演を行っている。今回、Latch と彼の親友 Thomlinson 教授が座長で消化管病理学のシンポジウムが生まれ、私は「Gastric adenocarcinoma of fundic gland type: A new entity」というタイトルで発表した。この概念は予想通り英国ではあまり知られていなかったようで、シンポジウムの中では一番多くの質問が来て、演題を降りてからも数名が質問のため待ち構えているくらいで、反響の大きさに驚くと共に発表した甲斐があったと感じられた。

学会は英国 IAP との共同開催ということで、国内と近隣国からの参加者が中心であり、全参加者は400名くらいのこじんまりとしたものであった。規模が小さいのが幸いして英国の多くの病理医と交流することができた。英国病理学会理事長の Quirke 教授は消化管が専門であり以前から面識があったが、私の訪英を大歓迎していただいた。ノッティンガム城でのレセプションの後は、日英交流で日本に来たことがある英国若手病理医とその仲間数名と日本チーム3名で英国一古いといわれるパブでイギリスビールを堪能した後、インド料理を食べに行き、より親睦を深めることができた。

今回、私を含め3名という少人数ではあったが密度の高い交流ができ、十分な成果があげられたと実感した。そして、これまで行われてきた日英交流の成果も感じられた。英国は私の第二の故郷であり、今後も個人的交流に加え、病理学会の日英交流にも貢献し続けたいと思います。



Ilyas 大会長（愛称 Latch）と八尾学術評議員